
ラブカクテルス その20

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その20

【Nコード】

N9685C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は最高のパートナーと風の中でドライブしているような感じのカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は最高のドライブでございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はその時、普段では決して起きない時間に目を覚ました。

なぜだかはわからなかったが、妻を見ても起きてはいないし、娘の部屋を覗いても別段変わりはなかった。

俺は何だか喉が渴いていたのでキッチンへ行き、冷蔵庫から水を取り出してグラスに注いだ。

リビングのソファアに腰を掛けて何気なくテレビをつけた。

番組は海外のニュースだった。

しばらくぼーっと見ていたが、字幕もでないの、訳もわからず違うチャンネルに変えた。しかし違うチャンネルしても映る映像は大きくして変わらない外国のニュースだった。

幾つかのチャンネルを変えた後、ようやく日本人のキャスターが出ているニュースにたどり着いた。

俺はホッとしてようやくグラスの水に口をつけた。しかし、俺はそ

のままテレビの話題のせいで動けなくなったのだった。

朝起きると、珍しく主人がキッチンにいた。

しかもなんと朝食を作っていたので、私は冗談で、

まだ私は夢から覚めてないのかしら。あなたが朝食の用意をしてるなんてと、からかってみると、主人はそんなに変かな？と柔らかく答えて、優しくほほにキスをしてくれた。

珍しいことばかりするものだから、私は少しきみわるがりながら照れた。

主人も照れてはいたが、それを隠す様に朝食の支度に目を向けるのだった。

主人は家族の好きなホットケーキと、ソーセージにサラダのメニューで、手際よく料理をした。

本当に、たまにいやいや作る彼の料理は意外と美味しかった。

テーブルに料理が並び、コーヒーの香りがしてきた頃、娘が起きてきた。

三人家族が揃ったところで朝食は始まり、女二人にからかわれる主人を笑いながら、楽しい朝食のひと時となった。

そんな中、主人は天気が良さそうだからドライブに行こうと言い出した。私も娘も賛成した。

食器を片付けるのを引き受けるから早く支度しなさいと、主人が言うので、私も娘も、彼の顔を覗き込んで、何か怪しいと言うと、彼はまあまあいいからと、冷静に振る舞い、食器を片付けるのだった。

私たちは化粧と着替えにいつもと同じく時間を掛けて、支度し終わったのは一時間を過ぎた頃だった。

主人は愛車を磨きながら首を伸ばしていたが、別段文句を言うでもなく、車に私たちを誘い入れた。

そして、二人を見るなり綺麗だと褒めた。

私も娘も照れながらお礼を言うと、車は走り始めたのだった。

私がどこに行くのかと聞くと、主人は行きたいところがあるかと聞いてきたので、私も娘も首を横に振る。すると、じゃあ海まで行こうと、主人はボサノバ調の音楽を掛けながら屋根のウィンドウを開けた。

空は高く、秋晴れの雲一つないいいお天気だった。

風はすがすがしかった。

海まではかなりの距離がある。

私たちは途中で見つけた素敵なレストランカフェで昼食をとることにした。

そのお店はとてもいい雰囲気で洒落ていたが、お客さんはあまりいないようだった。

イタリア料理がメインのその店は、ウェイターの人も品がある感じのいい方で、私たちはその空気だけでもかなり満足だった。

他には負けない自慢のパスタのランチがオススメだと聞くと、そのメニューに三人ともなった。

そして、さすがオススメだけあって素晴らしい味と香りに私たちは満足し、しかもコーヒーマも、とても上品で感激した。

いい時間をこの店で料理と一緒にいただけた。

主人は、会計を自分に任せて車に戻るように私たちに言った。

私たちは、その素敵な時間と料理に感謝し、お店を出た。

振り返って見ると、主人はお店の人と握手を交して何か話をしているようだった。

車に戻った主人に、お店の方はお知り合いかと聞くと、違うが、あの素晴らしい姿勢に感動したものだからと言って、車を再び走らせ始めた。

なぜか、少し主人の目がウルンでいるように見えた。

しばらく主人は黙ったまま、車を走らせていたが、落ち着きのあるピアノの音楽を掛けて、それに合わせて少し体を揺らし始めた。そして、少しだけスピードを上げて風を楽しんでいるようだった。その風でなびく髪と、サングラスを懸けた横顔がとても素敵だった。私は何だかとても幸せを感じた。

しばらく走ると、とても綺麗なイチヨウの並木道に出た。

私たちが歓声を上げると、主人は車を停めて、少し歩こうと言った。私たちは、道に広がる落ち葉を音を立たせながらゆっくり歩いた。主人は写真を撮ろうと、カメラを出してきた。なんて用意が良いのだろう。

私たちは、上から降る落ち葉と、どこまでも続いているような立派な並木道をバックに、寄り添って撮影をした。

すると、その様子を見ていた気の良さそうな男性が、主人にシャッターを押しますかと、尋ねてきた。主人は礼を言ってカメラを手渡すと、私たちのところに走ってきて、嬉しそうに真ん中に入った。

私たちはそれを受け入れた。

主人は私たちの肩を抱き、自分の方へ引き寄せた。

男性は、羨ましそうに、ハイポーズとシャッターを押してくれたのだった。

そして、カメラを受け取る主人に、お幸せに。と言って、寂しそうに行ってしまった。

主人はその男性をしばらく見送っていたが、それから程なくして、行こうかと、私たちの方に振り向いた。

夕暮れ時が近づいた頃、私たちはようやく海岸がちらちら覗く辺りまで来た。

風は潮の香りをほのかに運んできていた。

そしていよいよ河岸線に車は移った。

やはりいつ来ても海はいい。

この大きさに何もかもを投げ出せる気がする。

そんな気持ちで、また歓声をあげた。

夕焼けが水平線の少し上に、この世で一番美しい宝石のように浮いている。

なんて素敵な景色だろう。

すると、車はトンネルに入った。

そして、それを貫けると、なんと、景色は一面の銀世界だった。

私たちは驚いた。なぜ、今雪が降る季節ではないのに。

しかし、その景色はとても素晴らしかった。

三人が見とれながら関心していると、車はゆっくり、次のトンネルに入っていた。

私たちは今見た景色の驚きを興奮して話していると、車が出たトンネルの先は、なんと桜が花を散らす春の景色だった。

しかも、どの桜も競うように花びらを降らせ、見事。その言葉しか形容する言葉が出なかった。

三人は見入った。

顔に花びらが付こうと、車内に入ろうと、構わなかった。

そして、車はまた次のトンネルに入った。

そこで、私は正気を取り戻した。

私は主人に、ここでこんなことが起きていることを知っていて連れて来たのか聞くと、彼は首を横に振った。

そして言った。

今朝のニュースで知ったことを。

私と娘は、それを聞くと、黙ってしまった。あまりの、あまりに急な知らせに。

主人は謝った。それを秘密にしていたことを。そして、これくらいしか私と娘にしてやるができなかったことに。

私と娘は顔を見合わせて笑った。そして、泣きながら運転している主人にキスをして礼を言った。

主人。彼の冷静な判断と、私たちを思いやってくれる愛に私たちは感謝した。

しかも今日という日は、今までで一番幸せで、素敵なものだった。きっと、今日が終わりだとしても、この思い出は私たち三人にとって最高のひと時。

それで終われるなら思い残すことはない。

私と娘は主人に寄り添った。

そして、車はトンネルを出た。

海辺を見ると、綺麗な夕日が大きな波のカーテンに透けて見えていた。

素晴らしい眺めだった。こんな光景は一生に一度も見れるものではない。三人は見惚れた。

そして波は大きくウネリ、私たちの方に近づいて来る。

映画なんかで見るよりも巨大で、きっと全てを飲み込むのだろう。

仕方がない。人間がしてきた結果からの報いだ。

しかし私は恐くない。きっと娘も、主人もそうだろう。

私たちは三人手を強く握り、最後の時を待った。

車は軽快に風をきり、走り続けていた。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9685c/>

ラブカクテルス その20

2011年2月3日14時57分発行